

ホイットマンの善悪観*

田村 晃 康

岐阜大学教養部英語研究室

(1968年10月31日受理)

I make the poem of evil, I commemorate that part also,
I am myself just as much evil as good, and my nation is—and I say there is in
fact no evil.¹⁾

私は悪の詩を作る、その一面をも誉め讃えるのだ、

私自身が善であると全く同様に悪でもある、またわが国家もそうなのだ——そして私は
言う、事実上悪は存在しないのだと。

1

イエイツ (W. B. Yeats) は自叙伝の中で、ホイットマンには Vision of Evil (悪を見る目) が欠けているため彼の詩には深みがないと言っている? こうした非難はイエイツひとりのものではなく、『草の葉』(Leaves of Grass) が出版されて以来常に彼に浴びせられてきたものである。エリオット (T. S. Eliot) もまた original sin (原罪) という考え方が失われ、厳しい道徳的努力の消えていくとき、詩や小説に描かれる人間像はしだいに真実性を失っていく、²⁾ という立場から、ホイットマンを攻撃した。現実と理想との間に恐るべき裂け目を認め、原罪とか十字架による贖罪という伝統的キリスト教の信仰に復帰していったエリオットは、現世と人間のバツカスの讃歌ともいうべき『草の葉』にどうしても共鳴できるものを見出すことができなかつたのである。従って彼はホイットマンの詩人としての真価を *Song of Myself* (私自身の歌)、*Children of Adam* (アダムの子等)、*Calamus* (カラマス) 等の、真にホイットマン的な詩にではなく、*When Lilacs Last in the Dooryard Bloom'd* (最後のライラックが前庭に咲いたとき) や *Out of the Cradle Endlessly Rocking* (はてなく揺れる揺籃から) のような死を歌った抒情詩に見たのであった。

しかしホイットマンに悪を見る目がなかつたわけではない。『草の葉』が始めから終りまで楽天的な調子に貫かれていることは疑いようもないが、彼が悪を見逃したり、その存在を否定したりしている証拠はどこにもないのである。彼もまた自己の内部と社会の至るところに悪の存在を認めて悩んだひとりであった。ただ悪に対する彼の態度が伝統的キリスト教 (特にカルヴィニズム) と異なっており、彼における救済がキリスト教の説くそれと全く逆の方向を指していたために、例えばホイットマンが「私自身が善であると全く同様に悪でもある……そして私は言う、事実上悪は存在しないのだと」と語るとき、西洋人にはこの言葉が非論理的な、野蛮人のたわごととしか見えなかつたのである。「原罪」としてのみ悪を把握するキリスト教の伝統に育てられた人々にはそれ以外の形で悪を考えることが困難なのであろうが、エデンの園の神話やエホバ対人間という関係を離れるとき、悪もまた抜きがたい人間の本性

*本論文は昭和42年10月8日、日本英文学会中部支部大会で発表した原稿に加筆したものである。

でなくなり得るのである。ホイットマンの見た悪はキリスト教の説く悪とは違った姿をしていたかもしれぬが、それをもって彼に Vision of Evil が欠けていたと決めつけることはできないであろう。

もっとも ホイットマン自身は体系的な哲学を打ち立てるような性格の持主でもなければ、そうした学問もしていない。自ら矛盾だらけであることを認めている。いやそれどころか『草の葉』の中では、

Do I contradict myself?

Very well then I contradict myself,

(I am large, I contain multitudes.)⁴⁾

私の言うことが矛盾しているというのか。

よろしい、それでは矛盾していることにしておこう、

(私は大きいのだ、私は多くのものを容れ得る者だ。)

とか、

Let contradictions prevail! let one thing contradict another! and let one line of my poem contradict another!⁵⁾

矛盾を行き渡らせよ、物事を互いに矛盾させよ、そして私の詩の各行を互いに矛盾させよ。

などと宣言して、むしろ矛盾の固まりであることを誇っている。従って彼の善悪観とても一つの中心思想を基礎に整然と体系化されたものではない。最初の考え方が不完全な場合には、全く別の考えで補充したり、他人の書物の思想を借りて訂正したりしている。これは学問的には無ざまなつぎはぎ細工と非難されようが、論理的思索よりも正確な現実把握を重んじたホイットマンにとってはごく自然な、かつ誠実な行き方であった。現実というものは、たいいていの場合、方法論的に整然と体系化されたときには、すでにそこから最も重要な部分が逃がっているからである。

以下述べることは、その混沌たるホイットマンの善悪観の形成過程をたどり、少しでもすっきりした形に整理しようという試みであるが、あるいはその意味では、かえって真髄を洩らしているかもしれない。

2

『草の葉』のテーマは、生、死、恋愛、友愛、等、実に多岐にわたっているが、そこに表現された思想はすべて一つの源泉にまでさかのぼることができる。生命への愛がそれである。1855年の初版⁶⁾に出た彼の最大の詩 *Song of Myself* (私自身の歌) の中でホイットマンは

In me the caresser of life wherever moving, backward as well as well as forward sluing,

To niches aside and junior bending, not a person or object missing,

Absorbing all to myself and for this song.⁷⁾

私の内には生命を愛撫するものが、私の行く先どこへでも、後の方へも前の方へも、くると回ってついて来て、

傍らのくぼみにも、小さな曲り角にも、人ひとりも物ひとつも見逃すことなく、
あらゆるものを私自身とこの詩のために摂り入れる。

と言っているが、まさにホイットマンは caresser of life(生命を愛撫するもの)であり、『草の葉』は生命の讃歌であった。一見矛盾している幾多の言葉もこの「生命への愛」という光に照らして眺めるとき、その底に共通の広い領域を持ち、不思議な調和を保っていることがわかるのである。

しかし、彼の慈しむ生命とは見える物の動きだけを言うのではない。無限にして永遠の“nebulous float”⁸⁾(星雲状の浮遊物)から人間や物が時間的・空間的存在として現われ出で、それらが再び nebulous float へと没入していく過程全体を含むのである。ホイットマンはこの万有生成の根源である nebulous float を Soul (靈魂) であると考えるので、森羅万象これみな靈魂の分身ということになる。言葉こそ異なるが、これはエマソンの Oversoul (大靈) とほとんど同じである。

I swear I think now that everything without exception has an eternal soul!
The trees have, rooted in the ground! The weeds of the sea have! the animals!
I swear I think there is nothing but immortality!⁹⁾

私は誓って言う、万物は例外なく永遠の靈魂を持つと思うと。
大地に根をおろした木々にも靈がある。海草にもある、動物にも。
私は誓って言う、あるのはただ不滅性だけだと思うと。

万物が遍在する靈魂の一部であってみれば、この世に不完全なものはない。すべてが所を得ていて、彼の目に映るものは善のみである。健康に満ち溢れるホイットマンは、1855年の『草の葉』初版で高らかに地球の屋根越しに“barbaric yawp” (野性の咆哮)¹⁰⁾を放ちつつ、生の欲びに駆られて、これこそ完全にして最良の世界だと歌う。

The soul is always beautiful,
The universe is duly in order, everything is in its place,
What has arrived is in its place and what waits shall be in its place…….¹¹⁾

靈魂は常に美しい、
宇宙は整然と秩序を保ち、万物が所を得ている。
到着したものは所を得ている、これから来るものも所を得ている……

Pleasantly and well-suited I walk,
Whither I walk I cannot define, but I know it is good,
The whole universe indicates that it is good,
The past and present indicate that it is good.¹²⁾

私は快活に満ち足りて歩いて行く、
どこへ行くかははっきり言えぬが、私はそれが良いことを知っている。
全宇宙はそれが良いことを示している、

過去と現在もそれが良いことを示している。

これはあるがままの世界の、歓喜溢れる肯定であり、讃歌である。ホイットマンの心は、一片の黒雲もまだ影を落したことがないかのごとく、楽天的に見える。それはまさにホーンが最後の大作 *The Marble Faun* (大理石の牧神) の中で描き出したドナテロ——動物精気に溢れて一挙手一投足に喜びを覚え、野獣のように完全に発達した美しい肉体を持つ自然児——のイメージと寸分の狂いなく重なる姿である。しかし人は疑うであろう、その完全さ、健全さ、いじけたところのない天真爛漫さは、赤子のそれと同様に既成の慣習や道徳に拘束されたことがなく、社会にひしめく諸々の悪に触れたことがないために辛うじて存在し得ているものではないのか、従ってひとたび荒々しく暗い娑婆の現実に接すればまたたく間に消え去ってしまう朝露のようにはかないものではないのか、と。現にタスカニの田舎からローマに出て来たドナテロは、愛する女性ミリアムに付纏う黒い影を払おうとして殺人を犯してしまったとき、瞬時にして天真爛漫さを失い、良心の苛責と懐疑に悩まされつつ陰うつな人世を渡るといふ人間共通の宿命を荷なうことになったではないか。

ホイットマンの楽天性は、しかし、ドナテロのような、牧神のそれではなかったはずである。彼は貧しい家庭に飲んだくれの大工の子として生れたために、早くから自活の道を切り開いて世の辛酸を嘗めねばならなかったからである。使走り、小学校教師、印刷工などの仕事を経たあと比較的長い間携っていた新聞編集の仕事は、彼にアメリカ社会の積極面と同時に、その暗黒面をも見せたはずである。彼の人間味豊かな敏感な心と激しい真実探求の意欲は、こうした体験の中で、彼が悪の問題を軽々しく見過すことを許さなかったはずである。実際、彼の目に映じたのは善だけではなかった。悪の存在は、死という動かしがたい事実と同様に彼を悩まし続けたのである。自ら「私は善のみの詩人ではない、私は悪の詩人たることも拒むものではない」と言っているように、『草の葉』では世の背徳を探り、すべての搾取されている人々、病める人々、犯罪者たちに共感の歌を寄せているのである¹³⁾

彼は悪の問題から片時も目をそらすことができなかつたのであり、彼の楽天主義は、実は悪の問題との絶えざる緊張関係のうちに保たれていたとも言える。この点は同じく汎神論的傾向を持つエマソンとホイットマンとを区別する著しい特徴の一つであろう。

汎神論者ホイットマンにとって靈魂という言葉は神と言い換えてもよいものであった。彼は神秘的直観により神の遍在を感じ、万物は神から発出したものであると考えていた。しかも自分の周囲の至る所に許しがたい悪しき行いを見たのである。不正に苦しむ何百万もの人々は、この世に悪が厳として存在することを示していた。それどころか、彼自身が社会によって禁じられ、従って当然抑制しなければならないはずの倒錯した欲情に激しく苛まれていたのである。これは当然「悪」とみなされることであり、キリスト教徒ならば必ずや原罪の真实性を痛感したであろうと思われる体験である。一体神が悪であり、悪が神に宿ることがあり得るであろうか。

1855年の『草の葉』初版では、すでに彼なりの解決を見出していたようであるが、それ以前の草稿には、このジレンマから抜け出そうとする彼の苦しい努力がはっきりと読みとれる。そして社会の悪に対する彼の鋭い目は、のちの *Democratic Vistas* (民主主義の展望) にもみられるごとく、終生曇ることがなかったのである。1856年に加えられた詩 *Crossing the Brooklyn Ferry* (ブルックリン渡船場を渡りて) の中では、すでに苦しみを離れた者の安らかさをもって、彼もまた自己の心と社会の内にひそむ「悪」と呼ばれるものを見、体験した

ことを告白している。

It is not upon you alone the dark patches fall,
The dark threw its patches down upon me also……
Nor is it you alone who know what it is to be evil,
I am he who knew what it was to be evil,
I too knitted the old knot of contrariety……
Had guile, anger, lust, hot wishes I dare not speak……¹⁴⁾

その暗翳が蔽いかかるのはあなたの上ばかりではない、
その暗翳は私の上にも蔽いかかったのだ……
悪が何んであるか知っているのはあなた方ばかりではない、
私もまた悪が何んであるかを知っていた者だ、
私もまた自己矛盾という古い難題に迷い込んだのだ……
偽りの企み、憤怒、煩惱、また口にもし得ない激しい欲情も持っていたのだ……

3

汎神論と悪の存在という現実との板挟みから抜け出す契機になったものは、進化論的な考え方であったと思われる。彼は、靈魂とも神とも、時には Self (我・本性) とも呼んでいる普遍的な存在を、無限の可能性を秘めて絶えず発展していく生命の流れとして捉えるに至ったのである。西欧の伝統の内に育ったホイットマンはあくまでも西欧的であった。東洋哲学を読んで言いしれぬ感銘を受けたとは言え、「色即是空、空即是色」とか「絶対矛盾の自己同一」というような見方で時間を超越して実在を達観し、現象界の矛盾対立を打ち破ることはできなかったのである。彼には一見、直観により一如の世界を捉え、論理を超越したところに絶対真理を見る東洋思想に酷似したところがありながら、『草の葉』や彼の散文をよく読んでみると、また実に理知的、論理的であることがわかる。

さて靈魂を不断に発展する生命の流れと同一視するところから、善悪に対して三つの態度が生じてきた。その第一は、悪は一時的、偶発的なものであって、キリスト教の説くような人間の本性そのものではないとする態度である。現在において悪の焰がいかに激しく燃え盛ろうとも、それは生命の不断の前進においては付随的な出来事にすぎず、やがて消え去り、最後には善と完全性がこの世に実現されるという。

They go! they go! I know that they go; but I know not where they go,
But I know that they go toward the best—toward something great.¹⁵⁾

彼らは行く！ 彼らは行く！ 私は彼らが行くことは知っている、しかしどこへ行くかは知らない、
だが、私には彼らが至高のものに向かって——何か偉大なものに向かって——行くことだけは分っている。

理想時代の到来を未来に期待したことは、彼の善への信頼と現実とをある程度和解させ、世の不正と邪悪とに耐えて生きる勇気を彼に与えたに違いない。

その第二は、一般に善とか悪とか呼ばれているものも再吟味しなければならないという考

え方である。従来の静止した階級社会にあっては、価値観は不変にしてかつ普遍であると考えられ、伝統や慣習が善悪に関しても一定の規準を与えていた。人間の墮落や原罪に対する信仰は、まさにそのような社会の病的な産物であると思われた。固定した善悪観は不断に前進する生命力、不断に発展する社会にとっては、一見支柱のように見えながら、実は動きを束縛し、進行を妨げる枷にすぎない。善と言ひ悪と言つても、それは畢竟ある時代のある社会が体制を維持する必要上設けられたものにすぎず、時代と場所が異なれば自ずからそれらの内容も異なるのだ。リリパット国で与え得る最高の榮譽もプロブディングナグ国やイングランドでは無意味なものでしかなかった。社会が古い殻を脱ぎ捨てて進歩するとすれば、善悪の内容も絶えず新しい社会にふさわしいものに改めねばならない。人は社会が与える眼鏡を通してのみ善悪を見ることに馴れると真実を見る目が曇ってしまい、悪でないものを悪として糾弾したり、目の前に現存する大きな悪を見逃してしまう。しかも真実に盲目となった人間ほど悪に弱いものはないのである。彼はソクラテスと同様に、自明のものとして受け入れられている通念をまず最初に疑ってみる必要があると考えたのである。伝統や過去の遺産は、現在が未来に向って前進するのに役立つ初めて意味を持つのであり、自分を隸属させ、圧殺してしまうような外から与えられた規範はかなぐり捨てなければならない。道徳律の不可侵性などという考えは、ただ破廉恥漢が正直者を食いものにすることを許す虚偽にすぎない。自分の目で見、体で確めた事実に基いて新しい規範を打ち立てるときこそ、真の道徳が生れるのである。

こうした善悪の相対性はエマソンによって早くから説かれていた。彼は『自恃論』の中で次のように言う。

No law can be sacred to me but that of my nature. Good and bad are but names very readily transferable to that or this: the only right is what is after my constitution; the only wrong is what is against it.¹⁶⁾

私の本性の掟以外に、私にとって神聖な掟はあり得ない。善とか悪とかは、極めて容易にあれこれに移し得る空名にすぎない。正とは自分の本性に適ったものことのみであり、悪とはただ私の本性に反したものことのみである。

善とは我がよしとみたもの、悪とは我が非認したものということになるが、これは、しかし、単なる利己主義であってはならない。エマソンにおいてはSelf(我)がOversoul(大霊)に通じていたように、ホイットマンにおいてもSelfはそのまま宇宙的な靈魂であり、Life(生命)の表われであった。従ってホイットマンにとって善とは、生命を押し進め、増大させるもの、悪とは生を拒み、涸らすものことであった。善はまた自分一個の小さな我を捨てて宇宙的な我に立ち、人間の誕生と成長と死とを含めて生命全体を肯定し、愛することであった。生こそ最高の価値であるが故に、偽善、陰険、逡巡、過度の従順、保守主義、権威主義などはすべて悪なのであり、生への無関心ともいうべきニヒリズムは悪の中の悪、まさにdeadly sins(地獄に落ちる罪)の一つと思われたのである。

古い道徳を捨てたホイットマンは『大道の歌』(Song of the Open Road)の中で、

From this hour I ordain myself loos'd of limits and imaginary lines.
Going where I list my own master total and absolute.¹⁷⁾

今、この時から、私は制約や仮想の境界線から自らを解放することを命ずる、私は全くかつ絶対に自分自身の主となって好きなところへ行く。

と歌うが、この「制約や仮想の境界線」とは、すでに存在意義を失いながら、しかもいまだにしっかりと彼を拘束していた旧秩序や既成の道徳と考えてよいであろう。

慣習を捨てて新しい道徳を打ち立てる決心を固めたことはホイットマンを重大な精神的危機から救ったと考えられる。というのはそれまで抑圧していたセックスから解放されたからである。今や生命に対して全面的に「しかり」と肯定したホイットマンは、vital instinctsこそ生命力の発展にとって不可欠の要素であるとして、当時の道徳によって悪とされていた性の衝動をも肯定したのである。そして1860年版の『草の葉』には *Children of Adam* (アダムの子等) という一群の詩を加えて、高らかに性の讃歌を歌い上げることになる。

この『アダムの子等』という題はあきらかに聖書のエデンの園の神話からとられたものであるが、ホイットマンは長い間受け入れられ、西洋人の心に深く根をおろしていた解釈を逆転させている。言うまでもなく西洋文明に人間の本性が悪であるという考え方を植えつけたのは失楽園の物語である。アダムは神の命令にそむいたため最初の無邪気を失い、死と悪とをこの世にもたらしたというのである。

鈴木大拙によれば、この神話の中のエデンの生活は、まだ二元性の意識のない無垢の状態を象徴する。そこには多様性はあってもその意識はないために、事実もないに等しい。知恵の木の実を食べたというのは二元性の意識が出たことであり、善悪の判断はこの意識から生れた。人間が永遠にエデンから放逐されたというのは娑婆世界が楽園と絶縁状態になったということで、この神話は人間性が神性と絶対に相入れないものであるという西洋的な二元性の考え方を的確に表現している。しかし禅の立場から言えば「楽園は決して失われぬ、吾らは逐われたことはない、今でも楽園を娑婆の真中へかつぎ回っている¹⁸⁾」のである。人間にエデンから逐われたと感じさせているのは二元的、対立的にしか認識できない分別知なのであって、一元も二元もない無に徹し、空に徹しさえすれば、この世はたちどころにエデンの楽園になり得る、というのが大拙の主張なのであろう。キリスト教にあっては、人間性と神性という絶対に相入れないものはキリストを介してはじめて合一可能になるのであるが、仏教は無明の壁をつき破ることにより人間自身がエデンを手に入れられると教える。大拙は、従って、「無心」ということを強調した。

ホイットマンもまた、生れながらの無垢の本性を汚し、エデンの楽園を失ったのはアダムではなくて、アダムの子孫たちだと考える。霊と肉とを分けて考え、アダムの生き方を悪とすることによって、彼ら自身が自らを楽園より追放したのである。楽園の回復に必要なことは肉そのものを否定することではなくて、肉を罪深いものとする見方を改めることであり、人間の中のアダムのなものをあるがままに認め、受け入れることなのである。何故ならば人間がアダムの子らであることは決して恥ずべきことではなく、誇るべき光栄なのであるから。鳥も獣も、ただの一度も隠れて悪事をなしたり自分を猥雑と思ったりしないではないか。もしわれらが隠れて悪事をなしたり、猥雑な自分を見出すとすれば、それはわれら自身が下劣だからなのだ。本然の姿に戻れ、その時にこそ楽園は人間に返ってくるのだ、と "chanter of Adamic songs" (アダム風の歌い手)¹⁹⁾ は主張する。

To the garden the world anew ascending,

Potent mates, daughters, sons, prelude,
 The love, the life of their bodies, meaning and being
 Curious here behold my resurrection after slumber……²⁰⁾

この園に、あらたに世界は上り来らせる、
 力みなぎる夫婦と、娘らと、息子らを、
 愛と、彼らの肉体のいのちと、意味と存在との前ぶれとして、
 眠りののちの私の復活を、ここに物めずらしく、うち見守れ……

アダムの子等が長い眠りから目覚めて、力強い男となり女となるときこそ、人類が至福を味わい、世界が楽園に上るのだというのである。

性は決して暗い卑しいものではなく、生命を増大させる力なのである。一切のものを内に蔵し、一切のものを生み出す源泉であり、人類や社会の進歩もそれなくしてはあり得ない。‘A Woman Waits for Me’ (女が私を待つ) の中で彼は性のもつ無限の意味を次のように述べた。

A woman waits for me, she contains all, nothing is lacking,
 Yet all were lacking if sex were lacking, or if the moisture of the right man
 were lacking.

Sex contains all, bodies, souls,
 Meanings, proofs, purities, delicacies, results, promulgations,
 Songs, commands, health, pride……

All the governments, judges, gods, follow'd persons of the earth,
 These are contain'd in sex as parts of itself and justification of itself.²¹⁾

一人の女が私を待つ、彼女は一切のものを含み、何ものも欠いていない、
 しかしもし性が欠けていたら、適当な男の湿り気が欠けていたら、一切のものが欠けて
 いるのだ。

性は一切のものを含む、肉体を、靈魂を、
 意義、証左、純潔、繊細、成果、宣言を、
 詩歌、命令、健康、矜持を……

地上の一切の政府と、裁判官と、神々と、人の先に立つ人々を含んでいる。

これらのものは、それ自体の部分として、また、それ自体を正当づけるものとして、性
 に含まれている。

このようにして性を肯定したホイットマンは、新しいアメリカのために “fierce athletic girls”²²⁾ (熱烈な、たくましい少女) の到来を期待する。(ここで彼が決して自由恋愛を奨励しているのではないことに注意したい。性の快楽面を無視しているわけではないが、彼が性を重視するのは、主として完全な人類を造り出す手段としてなのだ。)

ところでホイットマンのセックスにはアブノーマルなところがあったことは広く知られている。『カラマス』(Calamus)²³⁾ という詩群は明らかに彼の同性愛的欲情の昇華、ないしは彼の生涯の隠れたエピソードを歌ったものと考えられている。学者の中には、正常な男女の愛を歌った『アダムの子等』は『カラマス』よりもあとに書かれた一種の付け足しであり、そ

の目的は『カラムス』詩群のもつ異常さをカムフラージュすることであったと言うものもある²⁴⁾ 彼が現実の女性に何の興味も示さなかったことは若い友人ピーター・ドイルや実弟の証言にもみられるし、『草の葉』に感銘したギルクリスト夫人から熱烈な求婚の手紙を受け取ったとき彼が当惑し、のち夫人が子供たちを引き連れてはるばるアメリカにやって来て結婚を最後まで断ったという有名な逸話からも察せられる。

実際ホイットマンは、長い間自分のアブノーマルな欲情に悩まされ続けてきたのであったが、1860年になると『草の葉』の中に『カラムス』という詩群を設けて、そこに火山の噴火のように激しく、それまで塞止められていた感情を爆発させているのである。彼がこれらの詩を書いた理由は、何としても自己を苦しい抑圧から解放したかったからであり、そのためにはそれを告白する必要があると感じたからに違いない。しかし、また、同時に、彼は自分の生きている社会のタブーを考慮せずにはおれなかったはずである。同性愛が悪魔の仕業という烙印を押されていた、お上品な伝統の支配するあの時代に、あえて“paths untrodden” (人のまだ歩まぬ道)²⁵⁾ を歩んで『カラムス』を公けにするには『アダムの子等』以上に強力な理由がなければならなかったはずである。ホイットマンは、それまで自分も他人も経験してきたながら、社会の慣習によって抑えつけられてきたこの basic instinct の中に、積極的な善の要素が含まれているという確信を抱くようになっていたのである。というのはこの同性愛と呼ばれる感情の中には民主々義の絆になり得るものがあるからである。側にいてくれるだけで彼の心を安らげ、喜ばせてくれる友の存在は、靈魂が普遍・不滅であることを証明し、民主々義社会においてすべての人間が comrades (僚友) として連帯感を抱き得ることを具体的に示してくれたのである。それは理屈以上に強く民主々義の可能性を証し立てるものと思われた。『民主々義の展望』の中で彼は次のように書いている。

Intense and loving comradeship, the personal and passionate attachment of man to man—which, hard to define, underlies the lessons and ideals of the profound saviors of every land and age, and which seems to promise, when thoroughly develop'd, cultivated and recognized in manners and literature, the most substantial hope and safety of the future of these States, will then be fully express'd.²⁶⁾

強烈な友愛の情、男と男の個人的な激しい愛着——それは、はっきり言葉で述べ難いものであるが、すべての国、すべての時代の達見ある救済者たちの教えや理想の基礎となっているもので、風習や文学の中で完全に発展させ、涵養し、承認するならば、合衆国の未来に最も大きな希望と安全とを約束するようにみえるものだ——はその時十分に表現されることになる。

ここに至って、社会から「悪」のレッテルを貼られ、同性愛と呼ばれて禁じられていたものは、ホイットマンによって“love of comrades” (僚友の愛情)、“manly attachment” (男らしい愛着)へと転化され、人類への愛にまで高められて、万人同朋の意識として民主主義の理想を実現するための基礎とされたのである。

このようにして既成の善悪観を打破し、新しい道徳を打ち立てることによって、ホイットマンは自らを抑圧から解放し、精神的危機から脱するとともに、またそこに将来の民主主義の可能性をも見出したのであった。

4

生命が善と完全性とに向かって不断に発展し、成長するものであると考えたホイットマンが最後に到達した立場はヘーゲルの弁証法であった。すでに、生の進化の過程において悪は一時的なものにすぎないこと、および善悪の区別さえ新しい基準に基いて立て直さねばならないと感じていたホイットマンは、ヘーゲルを読むことによりその二つの立場を高め融合するような理論を手に入れたのであった。それまでの彼は、いかなる考え方をとるにしろ、悪そのものが少しでも現在や未来に存在し得ることに人間に対する摂理の不正を見、苛立ちを覚えぬおれなかつたのであるが、今や絶望することなく悪の必然性を肯定することができるようになった。というのは弁証法は生命の進化が決して直線的でないこと、および悪なしでは善も善たり得ないことを教えたからである。生命力の信奉者としてのホイットマンは、善とは生命の味方、悪とは生命の敵と定義していたのであるが、実はその悪さえ生命の存続にとって必要不可欠なものであることに気づく。この思想は、自然発生的ないし生得的ともいえる楽天観を現実によって幾度も裏切られた彼の体験に一致したが故に、彼に熱狂的に受け入れられたものであろう。

ニーチェはのちに『善悪の彼岸』の中で「かの善き敬うべき事物の価値をなすところのものは、まさに一見それとは相反する悪しき事実と、じつは機微なる類縁を持ち、結ばれ、繋がれ、ことによつたら本質的に等しいものである、ということもありうる。」²⁷⁾と述べているが、ホイットマンはそれより20年前に、弁証法的観点から善悪の問題を考察して、同様の結論に到達していた。皮相な観察者を当惑させるこの世と人生の矛盾やパラドックス、ひいては善と悪さえ、みな永遠の創造的進化の過程で複雑に結びつき、一連の発展段階をなしている、と述べたあとでホイットマンは次のように言う。

A curious triplicate process seems the resultant action; first the Positive, then the Negative, then the product of the mediation between them; from which product the process is repeated and goes on without end.²⁸⁾

その結果、奇妙な三幅対の過程をたどることになる。最初は正、次に反、次いで両者の仲裁の所産、そしてその所産から同じ過程が繰り返され、果てしなく続く。

ホイットマンは悪を“Positive”に対する“Negative”，つまり弁証法のアンチテーゼとみたのである。もしも善がテーゼとすれば、アンチテーゼとしての悪もまたジンテーゼである生命の発展にとっては不可欠である。人の善性は悪に出会い、もまれてこそ、強靱な真実のものになり得るのであって、そうした試練に出会ったことのない善は善という名に値しない幻影であり、偽善なのである。生命論者ホイットマンの考える悪とは生命を阻害するもののであったが、その悪とみなされたものさえ、実際は生命の発展にとって必須となれば、悪という言葉は一種の自己矛盾であり、名だけのものということになる。(たしかにより現実主義的な宗教である仏教は「悪との闘争」を云々しはしない。それは「苦」と戦うのである。) ここにおいて冒頭に掲げた詩句が初めて生きてくる。

私は悪の詩を作る、その一面をも誉め讃えるのだ、

私自身が善であると全く同様に悪でもある、またわが国家もそうなのだ——そして私は

言う、事実上悪は存在しないのだと。

ホイットマンにとって正しい生き方とは、光と闇の両方をすべての有機体の生命と不可分に結びつけたものとして肯定し、それらすべてを自らを強め成長させる滋養物に転化することなのである。

マーク・トウェインの短編に『ハドリバークの町を墮落させた男』というのがある。ハドリバークは、正直で廉直な町としての名声を三代にわたって博していた。その名声を永久に確保するため町では揺りかごの頃から子供たちに正直という徳を教え込み、性格形成期の青年たちを一切の誘惑から遠ざけていた。あるときこの町の人々は通りすがりの一人の旅人を怒らせてしまった。旅人は復讐としてハドリバークを背徳の町にすることを誓う。彼は金袋を持って町に戻ると、ある貧しい市民にそれを託し、その袋の正当な持主を探してくれと頼んで立ち去る。袋には書付がついていて、「中に160ポンドの金貨が入っているが、これは1、2年前この町で、ある市民から好意を受けたお礼である。正当な受取人を探してほしい。候補者が現われた場合、彼が旅人にかけてた言葉を書いて出させ、袋の中の言葉と一致した者に与えてほしい」と書いてある。この事件は新聞に載りたちまち評判になる。一方旅人は町の「高德者」として名の通っている人々に「あなたこそ該当者だ」と書いた誘惑の手紙を送る。彼らはみな欲望と良心の板挟みになって苦しむがために誘惑に負け、みな「私こそその恩人である」と申し出る。審判の日、彼らの虚偽は発かれ、町の虚栄心はたたき潰される。そしてそれまで町の標語であった“LEAD US NOT INTO TEMPTATION”（我らを試みにあわせてまうな）は、これを機に“LEAD US INTO TEMPTATION”（我らを試みにあわせてまえ）に変わり、ハドリバークは更生の一步を踏み出すことになるのである。旅人は町民にあてた手紙の中で“The weakest of all weak things is a virtue which has not been tested in the fire.”（火の試練を受けていない徳ほど弱いものはない）と彼らの道徳の脆さの原因を教える。

マーク・トウェインのこの架空の物語は、ホイットマンが最後に到達した弁証法的な善悪観の一つの意味を、まさにみごとに具体的な形で説明しているように思われる。善悪をひとしく肯定するとは、悪と妥協してよいとか、道徳的な行為を否定することではない。むしろ逆に犬儒派の“*taedium vitae*”（生の倦怠）とも快楽主義者の“*carpe diem*”（現在を楽しめ）とも無縁の、現実があるがままに直視する厳しい生き方を要求するのである。耐えがたい現実から逃避したり、刹那的な快楽に耽溺して生の苦しさを忘れるのではなく、苦しい現実到自己を投じ、自から進んで試練を受けることなのである。

それはまた人間としての責任を、神をも含めて自分以外のいかなるものにも転嫁せず、一切自分の肩に引受けることでもあった。ホイットマンは“he who never peril'd his life, but retains it to old age in riches and ease, has probably achiev'd nothing for him worth mentioning.”²⁹⁾（一度も生命を危険にさらすことなく、富裕と安逸の内に老齢まで生き長らえる者は、おそらくは述べるに価することを何一つ自分のためにはしていない）ことを知っていた。生命の讚美者ホイットマンはすべての悪や障害を試練として受けとめ、味わう苦しみが大きければ大きいほどそれを克服したあとに受ける報いの大きいことを信じて生きる勇気を保ち続けたのである。

Not for nothing does evil play its part among us.³⁰⁾

悪が我々の間で役を演ずるのも何か目的があるからなのだ。

Political Democracy, as it exists and practically works in America, with all its threatening evils, supplies a training school for making first-class men.³¹⁾

現存し、実際にアメリカで行われているような政治的民主主義は、いろいろ危険な害悪を伴ってはいるが、一流の人物を養成するよい学校を提供するものだ。

I know now why the earth is gross, tantalizing, wicked, it is for my sake.³²⁾

私は今、なぜこの世が野卑で、人を苦しめ、邪悪であるのかわかった。それは私のためなのだ。

こうして幾多の体験と思索とを重ねたホイットマンは、初期の神秘的な汎神論に基く楽天主義を支える理論を手に入れ、再び万物肯定の世界に戻り、楽天的に確信をもって、"Not the right only justified, what we call evil also justified."³³⁾ (正しい行為のみに存在理由があるのでない。悪と呼ばれるものにも存在理由はあるのだ)と歌うことができた。「悪」もまた彼が熱烈に愛した宇宙の調和の一部であってみれば、もはや腹を立て、悩み、絶望する理由は何もない。最終的には時がすべてを解決してくれるのである。ホイットマンは自分が最後に到達した立場を"optimism with a touch of pessimism" (少し悲観主義の混った楽観主義)と述べたが、これはおそらく、彼の楽観主義が決して盲目的なものでもナイーブなものでもないことを言いたかったのであろう。彼は「ヘーゲルを読んだあとで」という副題のついた 'Roaming in Thought' (思想の中をさ迷いて) という短い詩の中で、悪の問題を追い求めた長い道程を要約して次のように述べた。

Roaming in thought over the Universe, I saw the little that is Good steadily
hastening towards immortality,
And the vast all that is called Evil I saw hastening to merge itself and become
lost and dead.³⁴⁾

思想の中で宇宙をさ迷って、私は善なる小さなものが不滅性に向って着実に急ぐのを見た、

そして悪と呼ばれる巨大なすべてが急いで没入して消えてなくなるのを見た。

ホイットマンのこうした善悪観は、南北戦争に対する彼の態度によく表れている。最初北部が正義の代表であると考えた彼は、abolitionists (過激な奴隷廃止論者)と同様に南北戦争を善と悪との対立と見たのであった。従ってブル・ランの戦いで北軍が大敗を喫すると、悪が善に勝つのであろうかと、アメリカの前途に深い危惧を抱いたのである。しかし傷病看護人として戦争の現実と接して、問題はそれほど単純でないことを知る。大義のために苦痛に耐え、泰然と死につく英雄的な兵士は北軍だけでなく南軍にも数多くいたし、何よりも、正邪を越えた戦争そのものの残忍さ、悲慘さが彼には耐えがたいものになったのである。彼は今や、もし悪なるものがあるとすれば、それは南軍ではなくて、戦争という行為そのものであると考えるようになった。彼は速刻にこの大量虐殺をやめるようにと国民に訴えたが、戦争が少数の人間の訴えや祈りで終結するはずはない。その後の彼はこの戦争を避け得ない宿命として耐え、南北を問わず傷病兵の看護をしながら一日も早く戦争の終るのを待ったので

ある。そしてこれはアメリカの民主主義が直面しなければならない最初の大きな試練ではないか、この激しい戦いに耐え抜いたときにこそ、それは勝利者としての輝かしい栄光に包まれて世界の人々の面前に出ることを許されるのであろう、と考えたのであった。

Long, too long America,
Traveling roads all even and peaceful you learn'd from joys and prosperity only,
But now, ah now, to learn from cries of anguish, advancing, grappling with direst
fate and reconciling not.³⁵⁾

長い間、あまりにも長い間、アメリカよ、
お前は平坦で静かな道ばかりを歩いて、喜びと繁栄とからのみ学んできた、
だが今こそ、ああ、今こそ、前進し、恐ろしい運命と格闘して和解することなく、苦悩
の叫びからも学ぶべき時が来たのだ。

1865年、南軍が降伏し戦争が終結すると、民主主義は生き残り、未来への希望が再びアメリカ国民の間に芽を吹き、前にもまして力強く根を下していくように思われた。国は統一され、奴隸制は廃止されて、進歩発展していく民主主義の展望がホイットマンの前方に無限の彼方まで開けてきた。嵐去って地は固まったのだ。彼は、一般にもし悪が進歩にとって必要であるとすれば、南北戦争も、結局はアメリカの発展にとって不可欠なものであったのだろうか、感慨深く回顧したのである。

5

キリスト教によれば、すべての人間は生れつき完全に墮落した罪深い存在であり、神により罰せられ、永遠に救いから締め出されて地獄に落ちる価値しかなかった。この邪悪な本性にもかかわらず救済されることができるとすれば、それは人間自身の善行や功績によるのではなく、ただ神への信仰によるのであった。救済は選ばれた者たちに神が与える一方的な贈り物なのであり、贖われる者の罪の代価はすでにキリストの十字架を通じて支払われているというのである。

キリスト教のこうした教えの底を流れているものは、徹底した人間の無価値さ、罪深さの意識であり、悪に対する人間の力への絶望であるが、これはヨーロッパ精神が人間を絶対にして無謬と考える宇宙や既成社会の秩序に適合させようと試みたところから生じたものであった。彼らが体験したものは、しかし、心の不調和と自分自身との苦闘でしかなかったのである。人間はたとえ外に表われた行動が道徳的で、法に適っていても、生れながらの衝動が禁じられている場合、深刻な不安を覚え、自己の無価値さ、罪深さを感じずにはいないからである。現代の深層心理学はこうした無力感や不安が伝統的キリスト教の宗教体験の本質であったことを指摘している。原罪、神の恩寵、十字架の贖い、信仰による救済、来世における天国と地獄、といった教義は、まさにここから生まれたものであった。

アメリカという新世界に渡って来た最初の移民たちも幾分かは大陸の秩序感覚を持って来た。しかし彼らがそこで発見したものはただ未開拓の広大な自然だけであって、彼らを拘束する既成社会や階級制度ではなかったのである。一切の束縛から解放され、思いのままに土地を入手して切り開き、自らの手で豊かな富や輝かしい名誉を獲得する、といった体験を重ねるうちに、彼ら（フランクリンはその典型であろう）はやがて、不正な社会状況から解放

されるなら、人間といえどもまた賢明な有徳な行いをすることができるという信念を抱くようになっていった。そのアメリカ的楽天性はホイットマンに至ってさらに一層強いものになり、外からの権威を嫌い、人間の自由意志への信頼が倫理面にも投影して、「悪」もまた人間の力で克服することができると考えたのである。善悪の相対性という考えや弁証法的な見方は、そのようなアメリカの体験を踏まえて生れてきたものである。善悪観という特殊な問題の中にも未来に賭けるアメリカ的な前向きな姿勢を映し出している点で、ホイットマンはたしかにアメリカの国民詩人であったといえよう。

ところでホイットマンは、その善に信頼する楽天的な態度の故に、一般にはエマソンと同断に論じられ、片付けられているが、私には悪や人間性の弱さを無視することがいかに危険であるかを察知していた点で、エマソンよりは、彼の対立者と考えられるホーソンに近いものがより多くあるように思えるのである。一見奇異に聞えるかもしれぬが、一般にピユータンの伝統を継ぐと考えられているホーソンがその後期の作品で描き出したのも、ホイットマンと同様に、善と悪とのからみ合いを通して人間が成長していく姿だったのである。なるほど初期の諸短編、特に『あざ』、『ラパッチニの娘』、『イーサン・ブランド』、『若きグッドマン・ブラウン』等では、あくなきまでに人間性の暗い面を追求し、悪の本質を描き出してみせたのであるが、ホーソンはそれによって救いを福音主義的信仰の中に見出してはいない。罪を犯す人間を簡単に罪人と決めつけ、永遠の呪いと破滅を宣告することはできなかったのである。『大理石の牧神』のドナテロやミリアムのように、人間的な弱さの故に罪を犯しながらも激しい後悔の念に苛まれる人の心に、むしろその罪を贖い、その人を清める煉獄の浄火を見たのである。

ユダヤ教の教典『タルムッド』*The Talmud*の中に“The repentant sinner stands even above those who have never sinned.”(悔い改めた罪人は、一度も罪を犯したことの無い人よりも一層高い所に立つ。)という言葉があるが、自ら悪や弱点を持たぬ人、(いやそのような人が存在しないとすれば)自らの悪や弱みを意識せぬ人はとかく他人に厳しく、ギリシヤ人のいう *hubris* (傲り)の罪を犯し易い。ホーソンもホイットマンも、神への完璧な信仰よりもむしろ悪の中から這い上ろうとする人間的な努力の中に、人を救済し、高貴にする契機を認めたのである。ホーソンの代表作と考えられる『緋文字』も、私にはそうしたテーマを取り上げた作品と思えるのである。

註

- 1) 'Starting from Paumanok', 12, 5-7.
- 2) W. B. Yeats; *Autobiography*, London, 1961, p. 246.
- 3) 吉田健一・平井正穂(監修);『エリオット選集・第3巻』, 弥生書房, 1967, p. 50.
- 4) 'Song of Myself,' 51, 6-8.
- 5) 'Respondez,' 15.
- 6) ホイットマンの詩集は『草の葉』一冊であるが、これは版を重ねるごとに新しい詩を加え、古い詩を訂正、削除していったものである。'So Long!'の中で彼は“Camerado, this is no book,/Who touches this touches a man…”(友よ、これは本ではない、これに触れる者は一人の人間に触れるのだ)と言っているように、『草の葉』はホイットマンと共に成長したもののなのである。
- 7) 'Song of Myself,' 13, 8-10.
- 8) 'To Think of Time,' 9, 4.
- 9) *Ibid.*, 9, 1-3.

- 10) 'Song of Myself,' 52, 3.
- 11) 'The Sleepers,' 7, 38—40.
- 12) 'To Think of Time,' 8, 22—25.
- 13) For example, see 'Song of Myself,' 42, 17—22.
- 14) *Op. cit.*, 6, 1—9.
- 15) 'Song of the Open Road,' 13, 22—23.
- 16) Brooks Atkinson (ed.); *The Selected Writings of R. W. Emerson, 'Self-Reliance'*, Modern Library College Edition, New York, 1950, p. 148.
- 17) *Op. cit.*, 5, 1—2.
- 18) 『鈴木大拙・続禪選集5—東洋的な見方』, 春秋社, 1963, p. 142.
- 19) 'Ages and Ages Returning at Intervals,' 4.
- 20) 'To the Garden the World,' 1—4.
- 21) *Op. cit.*, 1—8.
- 22) *Ibid.*, 34.
- 23) カラマスというのは米国北部や中部に生えるしよぶのような草であるが、キャンピーによれば「男根状の固い葉と、男根状の根」を持つという。カラマスの根のからみあいが友情を思わせるとも言われているが、この詩群が時に同性愛の歌となっている理由はキャンピーの説明から理解できる。
- 24) R. Asselineau; *The Evolution of Walt Whitman: The Creation of a Book*, p. 114.
- 25) 'In Paths Untrodden,' 1.
- 26) F. Stovall (ed.); *The Collected Writings of Walt Whitman; Prose Works 1892, Vol II*, p. 414.
- 27) ニーチェ著、竹山道雄訳; 『善悪の彼岸』新潮社, 1961, p. 15.
- 28) Cited by Asselineau in *op. cit.*, p. 58.
- 29) 'Song of Prudence,' 52.
- 30) F. Stovall: *Op. cit.*, 'Democratic Vistas,' p. 385.
- 31) *Ibid.*, p. 385.
- 32) 'By Blue Ontario's Shore,' 18, 12.
- 33) 'Song of the Universal,' 2, 12.
- 34) *Op. cit.*, 1—2.
- 35) 'Long, Too Long, America,' 1—3.

主 な 参 考 文 献

- 1) Whitman: *Complete Poetry and Selected Prose and Letters*, ed. E. Holloway, Nonesuch, London, 1964.
- 2) —: *Walt Whitman's Poems*, ed. G. W. Allen and C. T. Davis, New York Univ. Press, 1955.
- 3) G. W. Allen: *Walt Whitman Handbook*, Hendricks House, New York, 1962.
- 4) V. K. Chari: *Whitman in the Light of Vedantic Mysticism*, Univ. of Nebraska Press, Lincoln, 1964.
- 5) F. Shyberg: *Walt Whitman*, AMS Press, New York, 1966.
- 6) R. Asselineau: *The Evolution of Walt Whitman: The Creation of a Book*, Harvard Univ. Press, Cambridge, 1962.

WHITMAN TOWARD GOOD AND EVIL

Teruyasu Tamura

Critics have constantly blamed Whitman for lacking the "Vision of Evil." According to the pantheistic view held by young Whitman, everything was the emanation of God, and the whole creation was good and in order. Nevertheless he saw the undeniable existence of Evil everywhere around him, and, also, he suffered from the evil passions in himself which were forbidden by society. Could it be possible that Evil could reside in God?

What saved him from this dilemma was the idea of evolution—the idea that the Soul is always advancing toward good, toward perfection. Firstly, it taught him that evils were temporary, accidental phenomena which would soon die away in the process of evolution. Secondly, it taught him that what was traditionally called "evil" had to be re-examined. The standard of good and evil, established to maintain the order of a community in the past, must be cast away or revised; otherwise it would be an obstacle to the progress of the Soul. No laws are universally sacred. Hence he set up a new moral law in accordance with the evolutionary principle: what improves or increases life is good, and what prevents it is evil. Thus he found out that many of the alleged evils were nothing but mistaken names given through anachronistic views of the world. He also affirmed the sexual instinct, seeing that sex is the source of all things, without which the progress of mankind is impossible.

Finally, he arrived at a dialectic view of Good and Evil. Good (thesis) cannot be truly good without Evil (antithesis). Good and Evil are inseparably bound up in the process of eternal creative evolution, forming a series of gradually higher steps toward perfection. If what is regarded as evil is, in reality, essential to the progress of life, the word "Evil" turns out to be a kind of self-contradiction. Thus he could once again sing optimistically, "I do not see one imperfection in the universe, / And I do not see one cause or result lamentable in the universe."